

## 普及情報

### 不耕起直播による小麦の省力栽培

#### 1 はじめに

小麦を安定生産するには、適期播種と排水対策が重要なポイントとなる。しかし、小麦の播種時期(10月下旬～11月)は降雨も多く、天候の影響で適期を逃してしまうことが多い。

そこで、適期播種と播種作業省力の両面を兼ね備えた不耕起直播栽培が取り入れられつつある。上郡普及センターでは、作物部の協力を得、排水溝同時設置の不耕起直播栽培実証ほを2年間設置した。

以下、実証結果を踏まえた普及の可能性について記述する。

#### 2 排水溝同時設置型不耕起直播栽培の概要

不耕起直播栽培は、その呼称のとおり稲収穫後のほ場を耕耘せず、直接小麦種子を播種(ただし、播種時には浅く耕耘)していく方法である。今回設置した実証ほは、この播種方法とともに施肥と浅い排水溝を1.2m間隔で同時に設置した(右写真参照)。

この播種方法の利点(実証結果)は、次の通り。

##### (1) 適期播種が可能

播種前に表面排水対策(排水の悪いほ場は、畦際に明きょ設置)をしておけば、比較的天候に左右されることなく適期に播種ができる。一度耕耘したほ場での降雨後播種は、トラクターで土をこねるようになり、晴天が続かなければ播種できない。一方、不耕起ほ場では土が固く、表面排水さえ整えば降雨後でも播種できる。

##### (2) 作業の省力化

播種前耕耘が省略できる。また、播種同時排水溝設置を行うため、播種後の排水溝設置作業の時間節減につながる。

##### (3) 排水対策の向上

1.2m間隔での浅い排水溝設置は、慣行の培土板利用の排水溝設置と異なり、見た目は十分でなく排水効果は期待できないと思えた。しかし、慣行(約3～4m間隔)に比べ密に設置しているため、排水

効果も十分である。

##### (4) 熟れムラの減少

慣行の培土板を利用した排水溝では、どうしても排水溝間際部の成熟が遅く、ほ場全体での熟れムラができる。しかし、排水溝同時設置型播種は排水溝を密に、浅く設置しており排水溝間際部の小麦の成熟も同程度で熟れムラが少ない。そのため、収穫作業もほ場内で刈分けすることなく、適期にすべてが収穫でき、品質、収量ともに向上の要因につながる。



部分耕＋不耕起播種方式で小麦播種を進める

#### 3 今後の方向

上郡普及センター管内の小麦栽培面積は2001年産は185ha、大規模土地利用型農家(11戸)と集落営農組織(14組織)の大半が作付けており、1経営体当たりの栽培面積は6haと多い。これらの農家(あるいは組織)は、水稲ヒノヒカリの収穫、出荷作業終了後に麦の播種作業に入ることや播種面積が多いことが要因で、悪天候が続けば播種適期を逃がしてしまう。

このようなことから、一部の大規模農家では不耕起播種を行っており、今後は不耕起による小麦播種への要求はさらに高まるものと思われる。

衣笠 哲生(上郡普及センター)